

## 第2章 銃後

勤労動員①〔北海道・札幌〕

# ホームシックで涙の勤労奉仕

佐藤

肇さんのお話から

○燕麦 イネ科の作物。馬の食糧としていた。

○勤労奉仕 勤労動員のこと。おもに軍需産業の労働不足が深刻化したために強制的に労働力として動員した。対象は学卒者、農家をはじめ、未婚の女子や学生、生徒、なかば強引に連れてこられた朝鮮人、中国人まで拡大した。

○多度志村 空知支庁内に所在した村。

○江部乙町 空知支庁内に所在した町。滝川市と合併。

昭和十六年（一九四一年）十二月八日、アメリカやイギリスとの戦争が始まりました。太平洋戦争です。私が旧制光星中学（現在高校）一年生のころです。一年生のときは多少机に向かつて勉強しましたが、二年生になると近所のイモほりや燕麦刈りなどの勤労奉仕によく出されました。

昭和十七年に丘珠に飛行場ができました。ここにも勤労奉仕に行きました。戦闘機が滑走路に出るための誘導路をつくりました。コンクリートがなかったので板でつくりました。お寺にある板を丘珠から篠路まで一日に八枚を担いで運ぶのです。はじめは「これくらいいけないだろう。」と思っていました。四枚か五枚も運んだら誰も動けなくなっていました。篠路と丘珠との往復の大変さを今でも覚えています。また、冬になると札幌から丘珠飛行場に向かう道路の除雪もしました。今ならブルドーザーで行いますが、当時はすべて人の手で行います。スコップで掘って車が通れるようにしたものです。

三年生になると地方の勤労奉仕にも行きました。雨竜郡の多度志村で水田の手伝いをしました。一回で十日間ほど二人か三人ごとに農家に泊まりこみ、農家の手伝いをするのです。ほかに、野幌のれんが工場に十日間、近くの製麻会社の除雪にも何日間か行きました。

四年生になり本格的に勤労奉仕に行くようになりました。六月に江部乙村の農家にりんごの作業などで四十五日間行きました。最初は三十日で帰れる予定でした。しかし、サイパン島で兵隊が玉砕し、戦地では兵隊がこんなに頑張っているのだからということ。勤労奉仕は十五

○河西村 帯広市に編入した村。

○飯場 工場などの現場近くに仮設された労働者の合宿所。

○留辺蘂 北見市、端野町、常呂町と合併し、北見市となった。

○上渚滑 現在の紋別市

日間延びたのです。ようやく帰れるなど思っていたころでしたので、ホームシックで泣いてしまいました。それでも、一生懸命手伝いをしました。七月末にようやく札幌に帰ってきました。八月には河西村の精糖工場に行きました。ここでは砂糖をつくるときに出る石灰のかすを毎日スコップで積み込む作業をしていました。農家の人たちは肥料がなかったため、肥料のかわりにこれを畑にまいたのです。当時、工場には札幌ビール会社の煙突にも匹敵する大きな煙突がありました。これに上ると帯広が一望できると聞いて、この煙突に上ることを何回も挑戦しましたが、どうしても上れませんでした。飯場という寮みたいところで、各自持参した布団で寝ていました。まだ十五、六歳でしたから、寝小便をたれる友達がいきました。私は責任者でしたので、友達の寝小便が仲間にはばれて恥をかかないようにと、ふんを干したりなどしました。ここには十月末までいました。結局、七十日間いたことになりました。

十一月初めには留辺蘂に行きました。二人で農家に泊まりこみ、客土といって、水田を掘って土管を入れて悪い水を落とすしかけをつくりました。十二月初めに帰ってきました。今度は上渚滑からさらに歩いて六里もの山奥へ入りました。木を切り出す作業の手伝いでした。学校の教室に泊まりましたが、とても寒い思いをしました。汽車で行くのですが、夜中じゅう立



北海道精糖会社

イメージ図

○配給 米や味噌、砂糖等の食べ物などの物資を、生活の必要に応じ、平等に割り当てて配る制度。砂糖・マッチの切符製の導入が最初。米については、昭和十六年（一九四一年）に始まった。

○慰霊祭 死者の靈魂（英霊）をなぐさめる儀式。

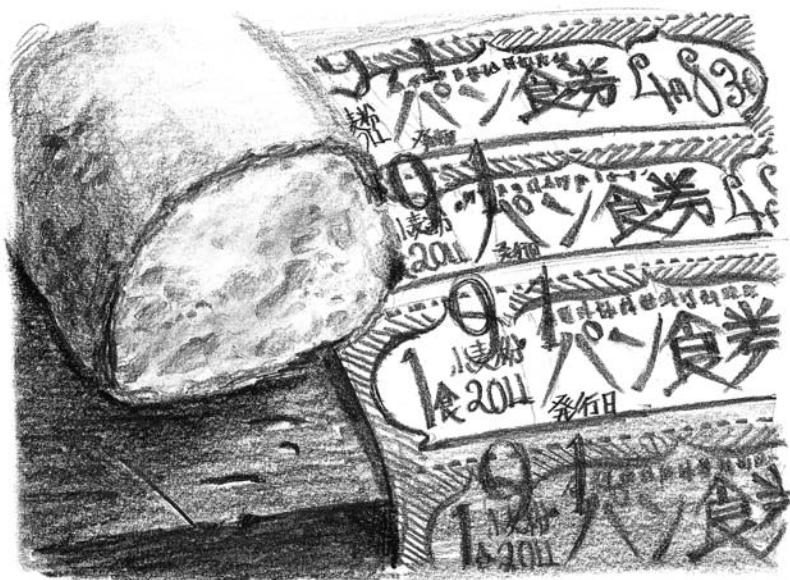
ち通しで、ぎゅうぎゅうづめの汽車でした。十二月二十七日に札幌に帰ってきて、正月八日にはまた戻り、三月三十日までクマが出る山で奉仕しました。

食べるものがなかった時代でしたので、イモやカボチャやトウモロコシなどばかりを食べていましたから、勤労奉仕に行くとお米のご飯があたることが多く、家にいるよりもご飯を食べられるということでもむしろ進んで行ったことを覚えています。

今は中学校へ行っても、高等学校へ行っても勤労奉仕はありません。しかし、私たちのころは、学校へは勤労奉仕のために行ったようなものでした。旧制中学校卒業とはなっています。勉強の時間は少なかったです。本来旧制中学校は五年間ありましたが、戦争が大変でしたので、四年生のときに卒業させられました。

日本は敗戦間近でしたので、食料に限らず、学校へ着ていく服、はき物もありませんでした。服は五十人に二着か三着が配給される程度でした。ですから、継ぎの当たってない服を着ている人はほとんどいませんでした。

昭和十八年、アリュウシヤン列島のアツツ島で二千六百人も兵隊が玉砕しました。このとき、月寒の北方軍（旧北部軍）司令部が中島公園で合同慰霊祭を行いました。市内の中学生が骨箱を中島公園まで持って行きました。英霊だからということでもまつな



パン配給券

イメージ図

服を着てはだめだということでしたが、みんな同じでひどい服を着て亡くなった兵隊の英霊を  
中島公園まで移して慰霊祭をやった記憶があります。

札幌も空襲を受けました。終戦の1か月前、丘珠飛行場にグラマンという飛行機がやって  
きてロケット弾を何発か落としました。ちょうど私の家の隣の畑に一発落ちました。円筒の  
ような、葉きようが抜けてからになったものを後で消防団の方が回収しました。そこで私の  
家でも庭に防空壕を掘りました。上に板を載せて土を載せて、今考えると、あのような防空  
壕では弾を一発でも食らったら何の役にも立たなかったはずです。けれども父が危ないからと  
言って一生懸命につくってくれました。

その折に、丘珠の飛行場の滑走路の入り口の方で農家をやっていた坂東さんというおじい  
ちゃんの家の中に、機銃掃射を受けてお亡くなりになりました。  
した。札幌で空襲を受けて亡くなったのは坂東さんお一人で  
す。私たちはこのことを忘れてはいけません。

終戦後は本当に食料もますますなくなり、衣服もありません  
でした。中学校へは兵隊のように、ゲートルというものをズボ  
ンの上から足にまいて行きました。また、上級生に道で会うと  
軍隊と同じように「おはようございます！」と敬礼したもので  
す。うっかり敬礼を忘れたりしたら、上級生からきつくおしか  
りを受けました。ですから、下級生のときは上級生が来るので  
はないかと思って気が気でなかったことを覚えています。

○機銃掃射 機関銃など  
を敵をなぎ倒すように広  
角度に発射すること。

○ゲートル 厚地の木綿  
などですねを包む服装  
品。外側をひもで編みあ  
げるものと巻きあげるも  
のどある。

○敬礼 敬意を表して礼  
をすること。

DATA

平成20年度東区平和事業

聴き取り

- ・平成20年12月11日
- ・伏古小学校



佐藤 肇(さとう・はじめ)さん

- ・昭和3年(1928年)生まれ
- ・札幌市東区在住